岩手県立
遠野高校

地域連携・進路学習

地域連携を無理なく継続、様々な体験活動で生徒に将来を考えさせる

◎岩手県立遠野中学校と町立女子職業補習学校が前身。校訓は「修徳尚武」。柳田國男著『遠野物語』の舞台として知られる遠野市の唯一の普通科高校。生徒はボランティア活動や郷土芸能保存会活動など、地域貢献活動に積極的に参加している。また、サッカー部は全国大会常連の強豪。

設立
1901（明治34）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約150人

2014年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、小樽商科大、室蘭工業大、弘前大、岩手大、秋田大、山形大、福島大、青森公立大、岩手県立大、都留文科大などに34人が合格。私立大は、岩手医科大、盛岡大、東北学院大、法政大、駒澤大、日本大、東海大などに延べ 48 人が合格。

住所
〒028-0525
岩手県遠野市六日町3-17

電話
0198-62-2824

Web Site
http://www2.iwate-ed.jp/ton-h/

変革のステップ

背景
◎進路学習の深まりがなく、明確な志望を描けない生徒、志望理由書や面接でアピールするものがない生徒が多かった
STEP 1

実践
◎3年間の進路学習などをまとめる進路ノート「修徳尚武」を開発。遠野市役所や外部機関と連携した体験活動を活発化
STEP 2

成果
◎地域や社会に目を向け、進路をより明確に描ける生徒が増加。郷土愛が深まり、地元で働きたいという生徒も増えている
STEP 3

遠野市や大学、NPO法人などと連携して学校外で地域活動

遠野駅から程近い商店街に、三田屋という元呉服店がある。この建物の前に、2012年9月、東京から来た建築家や編集者、大学生、遠野市役所の職員、そして岩手県立遠野高校の生徒十数人の姿があった。城下町遠野の町屋の中でも、古くからの暮らしぶりを伝える貴重な建物である三田屋。これを地域資源として活用すべく、遠野市や農業生産法人、大学・高校が一体となって調査・記録を進めるプロジェクトが行われた。建築学を学ぶ大学生の指導の下、生徒はスケッチブックに建物の図面を描き、近隣住民に昔の生活についてインタビューした。「かつての商店街のにぎわいを感じられるものが見つかり、うれしかった」と、参加した生徒は話す。

同校と外部機関とが連携した体験活動は、これだけではない。13年8月には、NPO法人「遠野まごころネット」が主催する、小水力発電を軸とした町おこしの勉強会に生徒が参加。14年8月には、東京大の教授や学生が遠野を舞台に地域活性化を目指す「東京大イノベーション・サマープログラム（TISP）」で1・2年生24人が学んだ。この時、生徒は大学生の指導を受けながら事前学習をし、当日はワークショップに加わって、遠野の魅力や可能性について発表した。生徒は、遠野の「おもてなし精神」を紹

介し、伝統・文化を引き継ぐには過疎化対策が必要であることを訴えた。

進路ノート「修徳尚武」に個々の進路学習の成果を蓄積

同校が遠野市や大学などと共同し、生徒が参加できる体験活動を始めたのは5年程前のことだ。当時、同校は進路指導で大きな壁にぶつかっていた。進路学習は3年生での調べ学習が中心で、期間が短いために十分に進路意識を深めることが出来ず、志望理由書も満足に書けない生徒が少なくない状態だった。進路指導課主事の助川剛栄（すけがわよしはる）先生はこう振り返る。

「当時の志望理由書は、通り一遍の内容が多く、生徒の意欲が感じられないものばかりでした。体験に裏打ちされた進路意識が醸成されていないので、自信を持ってアピールできるものがなかったからです」

改革の口火を切ったのは、10年度の1学年団だ。当時学年主任だった助川先生を中心に、3年間の体系立った進路指導を構築し、進路学習の取り組みなどを蓄積する進路ノート「修徳尚武」を開発した。講演会や大学見学などの進路学習を、「総合的な学習の時間」やLHRで行えるよう整理し、講演会や大学見学などの記録や、定期考査や模試成績などの結果を記入するワークシートを作り、1冊にまとめた（**写真**）。

講演会や大学見学は必ずメモを取りながら臨むように指導し、その内容や感想を書いて、翌朝には提出させた。感想はページの終わりまで書くように促し、生徒に書くことへの抵抗感をなくさせていった。翌年の1年生もこの取り組みを継承し、今は全学年で「修徳尚武」を活用している。「修徳尚武」が短期間で学校全体に定着したのは、多くの教師が体系的な進路指導の必要性を感じていたからだと、3学年主任の畠山（はたけやま）敏明先生は指摘する。

「進路学習を生徒の進路選択にどう結び付けていくかイメージが持てず、生徒が体験したことを生かしきれていないもどかしさがありました。『修徳尚武』によって3年間を見通した指導が出来るようになり、活動を生徒の進路実現にどう生かすか、学年団で目線合わせをしやすくなったのは大きな前進でした」

「修徳尚武」を受け継ぐ学年は、必ず前年度の反省や当該学年の方針に基づいて内容をリニューアルしている。この点も、取り組みの実効性を高め、形骸化を防ぐことにつながった。

「修徳尚武」の導入後、早い段階から志望理由を明確化できる生徒、興味ある分野について進んで理解を深めていく生徒が増えた。また、教師が予期しない成果もあった。

「教科の授業でも、宿題の提出期限を守る、文章はスペースの最後まで埋める、文字を丁寧に書くといった変化が見られました。『修徳尚武』は学年団全員が同じ目線で指導する

岩手県立遠野高校
助川剛栄 すけがわ・よしはる
教職歴26年。同校に赴任して6年目。進路指導課主事。「明るく、激しく、やり抜く」

岩手県立遠野高校
畠山敏明 はたけやま・としあき
教職歴26年。同校に赴任して6年目。3学年主任。「何事も柔軟に対応しながら、個々の生徒に合わせて指導を構築する」

岩手県立遠野高校
立花裕子 たちばな・ゆうこ
教職歴23年。同校に赴任して3年目。2学年主任。「常に前向きに、生徒の力を引き上げていく」

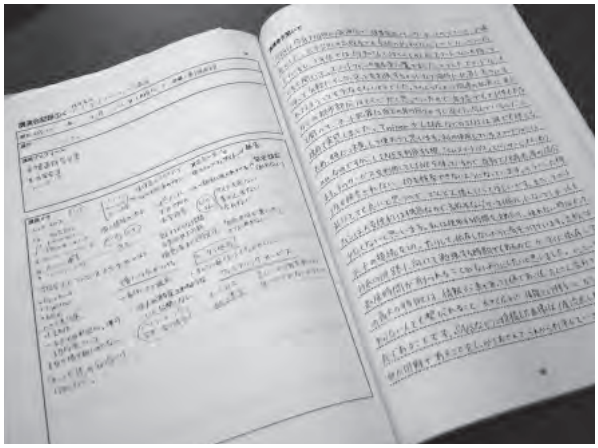

写真 「修徳尚武」の講演会記録では、左ページが講演メモ、右ページが講演を聴いた感想や意見を書くようになっている。右ページの最後の行まで書くように指導した結果、志望理由書はもちろん、授業の中でも自分の考えをきちんと記述できるようになっていった。

＊プロフィールは 2015 年3月時点のものです

ので、教師が大切にする学習規律が生徒に浸透したのだと思います」（助川先生）

以前の取り組みから活動を継続させる秘訣を学ぶ

「修徳尚武」の活用と並行して、生徒の視野を広げる取り組みを充実させていった。

実は、助川先生がその手法を模索していた時、進路指導部のロッカーで、10年以上前の研究報告書を見つけた。同校は99～01年度の3年間、県から「総合的な学習の時間」の研究校に指定され、「遠野学」という地域研究に取り組んでいた。それは、環境・自然、地域文化、地域産業など6分野を設け、グループ学習で遠野への理解を深めていくものだった（本誌02年10月号参照）。地域研究の先駆的な取り組みだったが、指定終了後間もなく途絶え、助川先生が赴任した09年度には既に行われていなかった。助川先生はその膨大な報告資料を読みながら、探究活動を継続・実行していくためのヒントを探した。

「報告書を見ると、どの活動も内容が大掛かりで、予算規模もとても大きいものでした。そのため、担当者が変わったり予算が制限されたりすると、継続が難しくなってしまっていたのです。私たちが進路学習を進めるに当たり、その点を踏まえて企画を組み立てることが重要だと学びました」（助川先生）

放課後、希望者のみ、低予算で継続性を重視した講演会に

助川先生は、早速探究活動の再開に向けて動き出した。ここで、先生にとって意外な展開が待っていた。市内で企業見学を行いたいと遠野市役所に連絡すると、「こちらで受け入れ先を探す」という回答があったのだ。この企画は東日本大震災が起きたために実現しなかったが、行政などに依頼すれば進路行事に広がりが生まれることを知る機会となった。そして何より、行政やNPO法人なども、高校との連携を望んでいることが分かった。

そこで、助川先生は、地域で活動している人や団体を学校に招いて講演をしてもらう「ミニ講座」を始めた。実施は放課後とし、全学年から参加希望者を募った。講演は無償でお願いし、定例の進路行事として位置付けた。これにより、授業や部活動への影響もなく、低予算で継続的に実施できるようになったのだ。

この講座が軌道に乗り始めた頃、遠野市経営企画部から冒頭に紹介した「三田屋プロジェクト」の打診を受ける。以降、様々な連携の依頼が来るようになった。14年6月には、遠野市と東京の企業が運営する「遠野みらい創りカレッジ」へ参加。これは閉校した市内の中学校を拠点にしたオープンカレッジで、地域住民を対象とするフォーラムやシンポジウムに生徒が参加し、遠野をより良い街にするための提言をした。

同年10月には、遠野市産業振興課との連携により、ものづくり産業振興のために県が企画した「遠野地区人材育成等モデル事業」へ加わる。市内の製造業12社の協力により、1年生全員が8コースに分かれ、3社ずつ見学した。企業には、高校卒と大学卒での就職の違い、社会人としての心構えなど、キャリア教育的な視点での講話をお願いし、生徒はその体験を「修徳尚武」にまとめた。更に、2年生の就職希望者は2日間のインターンシップも体験した。

各取り組みの負担を軽減し出来るだけ多くの体験活動を実現

連携に際して、同校では次のような基準を設けている。①生徒の卒業後の進路実現に生かせる、②毎年継続できる、③授業や学校行事、部活動の時間を妨げない、④費用が掛からない、の4点だ。当初は、スケジュールが合わず実施を見送る取り組みもあったが、今では学校の年間行事予定を外部機関にあらかじめ渡し、その予定に合わせて日程を調整してもらっている。

「連携では教師の負担はほとんどない」と助川先生は強調する。企画・運営は実施団体が担い、教師はメールと電話で内容のすり合わせを行う。依頼状や実施要項を作る手間もなく、移動の手配や保険の加入なども全て外部機関が行

う。教師は、全校に企画を告知して参加する生徒を募り、事後には、生徒が体験を書いた「修徳尚武」をチェックし、指導する。

「事前・事後指導について、先生方から『もっと時間を掛けてもよいのではないか』という声もありますが、そうするとどうしても負担が増えてしまうので、なるべくシンプルにしています。視野が狭く、多様な体験に乏しい生徒たちには、体験活動を数多く設けられるような仕組みにしておく必要があります。一つひとつの取り組みの負担を、出来るだけ軽減するように努めています」（助川先生）

そのような思い切った考え方が、継続のポイントだといえるのだろう。

参加していない生徒にも成果をどう還元していくか

活動への参加は生徒の主体性に委ねられているが、出来るだけ多くの生徒に体験してほしいという教師の思いは強い。建築や町おこしに興味がある生徒や公務員志望の生徒に「三田屋プロジェクト」への参加を呼び掛けるなど、希望進路に応じて参加を促す。教師の役割は、体験活動の運営ではなく、生徒と体験活動との相性を見て、取りまとめることだ。それは、生徒と日々触れ合っている教師にしか出来ない。2学年主任の立花裕子（たちばなゆうこ）先生は次のように語る。

「部活動に積極的な生徒に対しては、体験活動への参加を強く勧めていません。部活動の中では、そこで様々な体験が出来るからです。参加してほしいのは、部活動をしていない生徒や将来の展望が描けていない生徒です。体験活動に参加して、目的意識や進路選択の手掛かりをつかんでほしいのです」

進路指導改革を通して、明確に志望を描く生徒が増えたことを、教師たちは実感している。医療現場に赴いて看護師志望への思いを強くした生徒がいる一方で、逆に今の自分には難しいと感じ、進路を変更する生徒もおり、志望をより深く考える契機になっている。

「外部での体験活動を通して、遠野の良さに気付いた生徒も少なくありません。地域の課題について考える中で、遠野の発展のために、将来、地元で就職したいという生徒も増えています。単に公務員を目指すのではなく、目的意識を持って就職活動を行う姿勢は、以前には見られないものでした」（助川先生）

今後の課題は、体験活動の成果を参加者以外の生徒にどのように還元していくかだ。15年2月に法政大と行った地域活性化のワークショップでは、参加した生徒と大学生のグループが、2年生全員の前で活動成果を報告した。継続性とのバランスを考えながら、体験活動の機会を出来るだけ確保し、生徒全員の進路意識の底上げを図っていく考えだ。

学校外の組織と連携するコツとは？

教師自身がチャンスに気付くことが大切

進路指導課主事 **助川剛栄**

外部機関と連携する魅力は、私たち教師が思いつかないような広がりを進路学習にもたらしてくれる点にあると思います。大学教員や大学生、社会人、行政機関の職員など、様々な立場の人と共に体験活動をしていく中で、生徒は地域の課題を実感したり、調査・研究の面白さ、働くことの大変さに気付いたりします。教師の限られた知識と体験だけでは、伝え切れない示唆を与えることが可能だと思います。本校は、私にとって4校目の赴任校となりますが、今振り返ると、どの学校でもこのような取り組みは出来たのではないかと思います。大切なのは、学校外にある機会に、教師が気付けるかどうかです。まずは、学校外とのつながりをつくること。そして、外部から声を掛けられたら、門戸を閉ざさず、「生徒のためになるなら」と前向きに導入を検討する。少し学校の外に目を向けてみるだけで、教育活動の新たな可能性が広がっていくと思います。

東京大イノベーション・サマープログラム（TISP）での様子
東京大の学生と共に、遠野の魅力や可能性を整理、発表した。

今回のテーマに関連する過去の記事はベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでご覧いただけます。
2013年10月号指導変革の軌跡「新潟県立新潟高校」など
▶▶▶ http://berd.benesse.jp → HOME > 教育情報 > 高校向け